

平成 23 年 11 月 12 日

土砂災害防止の研修

1. 土砂災害とは

土石流、がけ崩れ、地すべりの自然現象により身体・生命に被害を生じる災害を言う。

(土石流、がけ崩れ、地すべりの3つの自然現象)

突発的、危険の認識しにくい

逃げ遅れ、死傷者が多い

2. 土砂災害の発生状況

災害列島 日本 地質 気候

全国で年間 1000 件程度発生 (最近 10 年間)

島根県は地質がもろく全国より多発傾向にある

全国で 2 番目に多い危険箇所 約 22,000 箇所

3. ソフト対策の推進

想定外、ハード整備の限界、被害者ゼロへの取組

どんなに大きな施設も・・・より大きな災害が・・・

「防災」と「減災」・・・自分だけは大丈夫? 宝くじ当たる気がする!

災害と事故は自分には当たらない?

防災情報の提供

「いつ」「どこで」

地域の防災力

「避難訓練」「自主防災組織」

個人の防災力

「知識」「避難」

家族を守るのは家族「早めの避難」

4. その他

自助・・・ 7 割

共助・・・ 2 割

公助・・・ 1 割

行政で 地域で 個人で それぞれにできることを するのが大切

「避難3原則」守り抜いた



高台に避難する釜石東中の生徒と鶴住居小の児童ら (住民提供)



背後を気にしながら高台を目指す子供たち。小学生は、中学生に手をひかれている。これは東日本大震災の大津波から避難する岩手県釜石市の鶴住居小学校(361人)、釜石東中学校(222人)の避難の様子を、住民が撮影した貴重な写真だ。釜石市内の児童・生徒はほぼ全員が無事に逃げ延びた。「釜石の奇跡」といわれる避難はどのように行われたのか。南海地震の大津波に備える西日本にとって学ぶべきことは多い。

(北村理)

「釜石の奇跡」小中生、大津波免れる

想定にとらわれぬ

海岸からわずか約1kmの鶴住居小では地震直後、校舎3階に児童が集まった。地震では建物自体は被害がなかったことや浸水想定区域外だったのが理由だった。海岸から近いにもかかわらず浸水想定区域外だったのは、明治、昭和の津波で被害がなかったからだ。しかし、児童が3階に集まり始めたころ、隣接する釜石東中では生徒は校庭に駆け出していた。校内放送は停電のため使えなかったが、これを見た児童たちは日頃の同中との合同訓練を思い出して自らの判断で校庭に駆け出した。児童・生徒ら約600人は、約500m後方にある高台のグループホームまで避難。ここも指定避難場所

②最善を尽くす

背後から聞こえる轟音と防潮堤にぶつかる白い波しぶきを見た児童・生徒はたどり着いた介護福祉施設からさらに高台へ駆け上った。津波は介護福祉施設の約100m前で止まった。すべてが避難開始から10分足らずの出来事だった。

市内では、すでに7割の児童が下校していた釜石小学校(児童184人)もあったが、全員が無事だった。祖母と自宅にいた児童は、祖母を介助しながら避難▽指定避難所の公園にいた児童は津波の勢いの強さをみてさらに高台に避難するなど、(こども)「避難3原則」が生かされていた。

③率先避難者になる

釜石市教委は平成17年から片田教授らとともに防災教育に取り組んでいたが、翌年の千島列島沖地震の際には避難率は10%未満だった。このため、片田教授は子供たちにも登下校時の避難計画を立てさせた。津波の脅威を学ぶための授業も増やし、年間5〜10数時間をあてた。そして、「避難3原則」を徹底してたたき込んだ。①想定にとらわれない②状況下において最善を尽くす③率先避難者になる。今回の大津波で児童が校舎3階から校庭に駆け出して高台に向かったこと、中学生が率先避難者となって小学生を導いたことなどすべてが「避難3原則」にあてはまる。

産経抄

(59)の第3歌集『栗原』(終書 手県釜石市の出身)

〈東北の空はやつば 回の東日本大震災に
り広いわねえ 簡単に 度7を記録した。
言ふなこの都会者 するのかと思つた
が。東京都世田谷区 戻るほどの揺れ
に住む狩野一男さん は、津波の被害の
手県釜石市の出身

月に始めた定期検査で原子一六 原発施設の深刻な安全日本は「その15年をもちに」

石巻・大川小の悲劇

海抜ほぼゼロ付近にその学校があった。北上川のほとりに立つ宮城県石巻市立大川小学校は、全校児童108人のうち、津波で74人が死亡・行方不明となった。学校にいて犠牲にならなかった教員は、教務主任の男性1人だけ。石巻市教育委員会が聞き取りを行ったこの教諭や関係者の証言から、当時の状況が明らかになりつつある。あの日、何があったのか。

(桜井紀雄、荒船清太)

大勢の児童が犠牲になった大川小学校。校門にはたくさんの花が供えられていた—14日、宮城県石巻市（古蔵正樹撮影）

避難する児童の列に津波

「裏山へ登っていたら…」

5時間目を終えたとき、大きな揺れが襲った。子供たちは机の下にもぐった。が、校庭に避難するように指示された。立ち出す子供もいたが、教諭らが付き添った。学校前に自宅があり、大川小に通う2人の孫を亡くした阿部文子さん(69)は「校庭に子供たちが整列しているのが見えた。ヘルメットをかぶっている子もいた」。校庭にはスクールバスが止まっていた。「子供の点呼を取っているところで、学校の指示待ちです。男性運転手(66)は運営会社に無線で連絡したが、これが最後だった。男性運転手も津波で死亡。会社は「詰め込めば児童全員を乗せられたい」としている。だが市教委によると、津波の際の避難場所は特に決められていなかったという。逃げなさいかと思つた。男性教諭はその瞬間をこう証言したという。津波が河口とは逆方向の橋をうごかした。児童たちに裏山を登らうとする児童が見えた。杉が生い茂り周囲は暗いが、「ゴー」という音で足元まで水が迫っているのが分かった。

「上へ、上へ！」
男性教諭は、校舎内を確認しに向かった。ガラスが散らばり、児童が入れる状況ではなかった。校庭に戻ると、子供たちは他の教員に誘導され、裏山の細い農道を列を組んで歩き出していた。坂道を行けば、校庭

よのめ7〜8歳高い新北上大橋の最後尾についた。一トンという地鳴りがあつた。向かっていたら、波が来た。逃げなさいかと思つた。男性教諭はその瞬間をこう証言したという。津波が河口とは逆方向の橋をうごかした。児童たちに裏山を登らうとする児童が見えた。杉が生い茂り周囲は暗いが、「ゴー」という音で足元まで水が迫っているのが分かった。

押し寄せる津波 動画で撮影

大川小学校周辺に津波が押し寄せる様子を、カメラがとらえていた。職員は、橋に近い高台から被害状況を記録するため、動画機能があるデジタルカメラで撮影していた。(動画は産経フォトとYouTubeの産経新聞チャンネルで)

道路と寸断される瞬間が収められている。警戒に当たっていた石巻市職員が撮影。約3分間にわたり、大川小の児童らが避難に向かう予定だった新北上大橋が津波にのみ込まれ、周囲の

「上へ、上へ。死にものぐるいで上へ行き！」と叫んでいた。3年の男児が追いつき、くぼ地で震えながら身を寄せ合ったが、お互いずぶぬれ。「このままでは寒くて危ない」と男児の手を引

き、山を越えた。車のライトが見えた。助けられた。津波が来る前に、親が車で迎えにきた子供は助かった。そんな中、他の子供と農道を歩きながら助かった5年の男児も2人いた。「山の中で『おひい』と声をかけて捜している」と聞かされた。駆け寄ってみると、髪までぬれた男の子2人が斜めに横たわっていた。石巻市北総合支所の佐藤幸徳さん(51)は振り返る。

「歩けるか」と声を掛けると、2人は「大丈夫です」と答えた。別の場所に移動し、他の避難者たちとたき火をして一夜を過ごした。2人は「誰かに大声で『山に逃げろ』といわれ」と説明したが、言葉は少な／＼ずとうとうむいていったという。

「何があったのか」「見つかったんだ」。市教委は「想定外の津波があった。山が崩れる危険がある中、農道に逃げる以外に方法があったかどうか分からない」としている。

不明の小1の長女(7)のもだった。つづれ、茶色に変色した。1人が残されていた。小4の次男(10)も亡くした阿部氏は、学校があった場所に通り続ける。「あの日、本当に何があったのか、知りたい」

震災当時、学校を不在にして助かった柏葉照幸校長(67)も捜索を続ける。男性は裏山を指して、柏葉校長に疑問をぶつけた。「ここに登れば助かったんじゃないですか」。男性によると、柏葉校長は「そうですね。現場にいらさうしたかも知れません」と答えたという。

行方不明の子供の捜索中、作業着姿の男性(40)が泥まみれの赤いランドセルを抱き、突っ伏してむせび泣いた。

「海のがれき」撤去進まず

東日本大震災で太平洋沿岸を襲った津波により流出した建物の破片や漁具、ボート、転覆したボート、

「トなどが、今も沖合で大量に漂流し関係者を悩ませている。行方不明者の捜索に当たる海上保安庁の巡視艇などの業務の妨げになっているほか、航路の障害にもなっている。漁業への影響も懸念されるため早急な対策が必要。ただ、陸上でも大量のがれき撤去が大きな問題となっており、「海のがれき」にまでは当手が回らないのが現状だ。

海保によると、岩手、宮城、福島の3県の数、数千ヶ所には、津波で流された建物の破片や杭、コンテナ、転覆したボート、

海上で発見された漂流物は通常、所有者が不明の場合は海岸の自治体処理を依頼するが、環渤海によると、今回の震災では岩手、

「トなどが、今も沖合で大量に漂流し関係者を悩ませている。行方不明者の捜索に当たる海上保安庁の巡視艇などの業務の妨げになっているほか、航路の障害にもなっている。漁業への影響も懸念されるため早急な対策が必要。ただ、陸上でも大量のがれき撤去が大きな問題となっており、「海のがれき」にまでは当手が回らないのが現状だ。

海保によると、岩手、宮城、福島の3県の数、数千ヶ所には、津波で流された建物の破片や杭、コンテナ、転覆したボート、

海上で発見された漂流物は通常、所有者が不明の場合は海岸の自治体処理を依頼するが、環渤海によると、今回の震災では岩手、